

## 海外投資環境セミナー

# モンゴルの最新事情とビジネス環境

駐日モンゴル国大使館 臨時代理大使 **ダンバダルジャー・バッチジャルガル**

## 1. モンゴルの概要

モンゴルの平均寿命は69歳で、日本と比べると非常に短い。人口増加率は2.2%である。内陸国で中国とロシアに挟まれているため、サンドイッチ国とも呼ばれている。地理的なメリットは、大きな市場に囲まれた国ということだ。モンゴルの人口からは市場が非常に小さな国だと思われがちだが、中国やロシアへと市場を拡大することもできる。もちろん、海に面していない内陸国であるという点ではマイナスの面もあるが、非常に広大な土地と豊富な資源を有する国である。

皆さんは、モンゴルというと草原というイメージが強いと思うが、草原だけではなく、山も森もある。国土面積の約8%は森林で、ゴビもある。ゴビというと日本では「ゴビ砂漠」と言われることがほとんどだが、アラビアなどの砂漠とは少し違う。モンゴルのゴビには黄河が流れ、植物も生え、山も若干あるからだ。モンゴルで「ゴビ砂漠」と言うと、「ゴビはゴビだ。ゴビ砂漠ではない」と言う人も多いと思うので、気を付けた方が良くかもしれない。

そして、海はないが、きれいな川と湖がある。フブスグル湖は、バイカル湖に次いで世界で2番目に透明度の高い湖といわれている。このように、さまざまな景色を楽しむことができるモンゴルでは、観光産業分野の発展が見込めるだろう。

気候にも少し触れておくと、日本でモンゴルというと寒い国をイメージする人が多い。確かに寒い。冬は気温がマイナス30℃まで下がり、特に西の山の方に行くと、マイナス40℃まで下がるとこ

ろもある。一方、夏は非常に暑く、30℃まで上がる。夏と冬の気温差が非常に激しいため、地方の遊牧民は大変激しい自然と闘いながら暮らしている。降水量は非常に少なく、山沿いの地域では年間300～500mm程度である。日本では1度の雨でも200mmを超えることがあることを考えると、モンゴルは非常に雨が少ないということが理解いただけるだろう。

## 2. モンゴルの歴史

モンゴルの歴史は1206年にチンギス・ハンがモンゴル帝国を創設したところから始まる。チンギス・ハンの息子、孫、ひ孫たちの時代にモンゴルはどんどん強くなり、世界の半分を支配した。チンギス・ハンの孫のフビライ・ハンの時代には、日本に攻め込んだこともある。しかし、ずっと強かったわけではない。中国の満州族に支配された時代を経て国民革命を起こし、初めて独立国になったのは1911年である。

そして、1921年には人民革命が起こり、社会主義国として独立宣言し、1961年には国連に加盟した。1990年には民主化運動が起こり、初めて複数政党制になった。社会主義の国から民主主義の国へ、経済としては計画経済から市場経済へと向かっていった。1992年には新憲法が施行され、国名もモンゴル人民共和国からモンゴル国に変更された。

### 3. モンゴルの政治体制

政治体制は日本とよく似ていて、4年に1度総選挙が行われる。しかし、国会は日本の参議院と衆議院のような二院制ではなく、76人の国会議員から成る。任期は4年間で、民主化後、2016年までに7回の総選挙が行われ、現在の議席は、人民党65席、民主党9席、無所属2席となっている。日本の自民党のような存在に当たるのが人民党で、民主党との2大政党体制となっている。2016年の選挙で人民党が過半数を占め、新しい内閣が政権をとっている。現在の国会の議長はミエゴンボ・エンフボルドである。

国会以外に大統領も存在している。大統領は全国民から選ばれる。大統領選挙は1993年に初めて行われ、2017年の選挙では、ハルトマーギーン・バトトルガが新大統領に選出された。

### 4. モンゴルの経済

主要産業は鉱工業で、資源に恵まれている国なので、資源開発には大変力を入れている。また、農業も昔から活発で、遊牧民による牧畜産業以外に畑も発達している。社会主義国時代も土地面積の約10分の1を産業発展に向けて利用し、野菜を中心に作っていた。ジャガイモから始まり、当初は野菜の種類は少なかったが、国産野菜は大変おいしく、国内需要をほぼ満たしていた。ただ、市場経済になってからは一時的に落ち込んだところもある。

2016年のモンゴルのGDP（国内総生産）は111億6,000万米ドル、1人当たりGDPは3,851米ドルであった。経済成長率は、2011年には17.6%と、世界第2位の経済成長率を示したこともあったが、2016年は1%にとどまった。インフレ率は1.1%で失業率は8.3%、貿易総額は82億7,500万米ドルである。

ビジネス環境としては、世界銀行の年次報告書「Doing Business2017」の格付けでは64位で、

まだ完全に皆さんのニーズに応えるほどには整備されていない。国の信用格付けは、スタンダード&プアーズ（S&P）やフィッチ、ムーディーズでBマイナスである。

モンゴル国政府は、2030年までの開発ビジョンを発表している。その中で、中所得国入りを目標に掲げ、農業、鉱業、観光を優先的な分野に据えて、1人当たりGDPを2030年までに1万7,000米ドルまで引き上げ、経済成長率は6%程度を目指していきたい。このほか、平均寿命を78歳まで上昇させ、貧困率をゼロに近づけたいという達成指標を設定している。

### 5. モンゴルの家畜

モンゴルは家畜が多い国である。人口は300万人程度だが、家畜数は6,154万頭で、人口1人当たり約20頭という計算になる。2015年の統計では農牧業がGDPの13.7%を占め、遊牧民の数は人口の約3分の1である。

モンゴルの家畜はヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、ラクダなどで、中でもヒツジが非常に多い。ヤギは、昔は少なかったが、今はカシミヤヤギが大変多くなっている。ヤギは牧草を食べるので、ヤギの数が多くなり過ぎると遊牧民への影響も生じる。

日本で「モンゴル人はヒツジをよく食べる」という話をすると、「ヒツジは臭いだろう」と言われることが多いが、モンゴルのヒツジの肉は大変おいしい。皆さんも実際にモンゴルに行って食べてみると、おいしいと感じると思う。

ウシ、ラクダ、ヒツジ、ヤギの肉は、輸出もしている。輸出先は主に中東である。モンゴルの肉がおいしいということで、大変人気がある。日本には、1990年代前半に初めて馬肉を輸出した。その後、日本企業がモンゴルに進出して、日本が輸入していたこともある。衛生問題があり、馬肉以外はまだ日本に入っていないが、加熱すれば肉の輸出も可能である。

カシミアの加工生産は中国に次いで世界第2位で、世界市場の3分の1を生産している。モンゴルは、カシミアの品質がいいといわれている。日本には中国からもカシミアが入っていると思うが、中国でカシミアを一番多く生産しているところは内モンゴルである。内モンゴルは元々モンゴルの一部であった。内モンゴルのカシミアはモンゴルより少し品質が劣るともいわれているが、それは中国はモンゴルからカシミアを輸入して、そこに自国のカシミアを混ぜるからだ。モンゴルのカシミアの方がミクロンも長さも良くて、特に色がとても良いという。自然の色で、何も色を付けなくても製品づくりができるということで、大変人気がある。

モンゴルの家畜は、本当はそれほど放牧しているわけではない。自由においしい牧草を食べながら育っているのがモンゴルの肉がおいしいとも言えるが、最近ではフランス、カナダからいろいろな品種の家畜を輸入するようになっており、新しい現代の牧場もできている。と殺工場や乳製品製造工場もある。

農業では、小麦やジャガイモなどの野菜づくりに力を入れていて、現在、ジャガイモは約8割を自給している。ジャガイモを含めて野菜の2割ほどは中国から輸入している。野菜の種類は少なく、今一番足りない野菜は豆である。最近、日本からの投資では、群馬や静岡からの温室栽培のトマトやイチゴが増えている。どんどん日本から投資していただければ、国として支援する方針である。

### 6. モンゴルの鉱山

鉱山分野は輸出の約86%を占めている。鉱山分野がモンゴルの経済をほぼ背負っていると言っても過言ではなく、外国直接投資の約64%はこの分野に入っている。鉱業分野の71%、国内総生産の20%を鉱山分野が生産している。

資源としては、石炭、金、モリブデン、ウラン、

石油などがある。ないものはないというくらい、資源がある国である。2017年に確定した埋蔵量は、銅では約5億7,100万トンである。

日本からの需要もあるが、日本に持ってくるロジティクスがまだそこまで整備されていない上、必ず中国、ロシアを通らなければならないという運搬の問題がある。これが解決すれば、日本との鉱山分野の協力はもっと発展していくと思う。

石炭はもちろん、金も毎年生産量が増えていて、2017年は2万トンくらいになると見込まれる。重工業では大きな工場が65か所ほどあり、鉱山を開発しているところや、精錬所もある。

### 7. モンゴルの観光

モンゴルが現在、大変力を入れているのは観光分野である。観光は大変発展が期待できる分野だが、まだGDPの3.2%にとどまる。この分野では約5万人が働いており、この産業から入る収入は約2億6,000万米ドルである。年間約40万人の観光客を受け入れており、その内訳は、隣国のロシア、中国が多い。日本からは、モンゴル帝国800周年の2006年には2万6,000人がモンゴルを訪れたが、今は年平均が約1万5,000人で、2015年は1万9,000人であった。観光分野全体で2020年までに100万人程度の観光客を受け入れ、収入も10億米ドルを目指す目標を立てている。

新ウランバートル国際空港が2018年3月から稼働し、便数が増えれば、この目標はすぐに達成できるだろう。われわれは今、日本政府との間で、日系航空会社の乗入れを検討しており、日本からのお客さんが、もっともって増えていくことを期待している。

観光商品もいろいろあって、自転車でモンゴルを巡るツアーは、特にヨーロッパの人たちに好まれている。また、高い山が多く、山登りや初日の出を見るツアーもある。最近では特にフブスグル湖でのアイス祭りが大変好評で、凍った湖でいろいろ

ろ楽しむことができる企画も人気を博している。

## 8. モンゴルと日本の外交関係

日本とは1972年2月24日に外交関係を樹立した。今年45周年の記念の年に当たることもあり、日本との関係は非常に重視している。日本では隣国の中国やロシアとバランスの取れた外交関係を保ちながら第3の隣国として接するという考え方があるが、モンゴルの外交方針は、第1、第2、第3と順番付けはせず、どの国も隣国だという考え方をしている。その国に入っているのは、日本、アメリカ、ドイツなどである。

もちろんモンゴルの外交の中で、日本は大変重視している国である。日本とは1972年に外交関係を樹立したが、1990年代まではさして発展していなかった。しかし現在、両国は戦略的なパートナーシップ関係にある。2010年の「戦略的パートナーシップ」構築に向けた日本・モンゴル共同声明の趣旨を踏まえ、「ハイレベル対話の促進」「経済関係の更なる促進」「人的交流・文化交流の活性化」「地域・グローバルな課題への取組での連携強化」という四つの関心分野を中心に、両国の関係を発展させていこうという新しい段階に入っている。

日本との貿易はまだまだ少なく、2016年の貿易額は約300億円であった。日本からの輸出の方がはるかに多く、一般機械や自動車などが入ってきているが、モンゴルからの輸出はわずかで、ほとんどがレアメタルや銅などの資源である。今後、日本への輸出をできるだけ増やしていきたいと強く希望している。

日本からの直接投資は2008年がピークで、毎年平均2,000万米ドルぐらいの投資があり、1990年から300社近くの企業がモンゴルに進出している。今後も戦略的パートナーシップの構築に向けて、互いに協力していきたい。

2017年は7月に大島衆議院議長がモンゴルを訪問した。今まで参議院議長は3回ほどモンゴルを

訪問したが、衆議院議長は初めてで、大変意義深いものであった。3月にはモンゴルの国会議長が訪日し、両国政府間で2017年から2021年までの新たな中期行動計画を策定した。

これまで2国間でさまざまな協定を結んできたが、直近では日・モンゴル経済連携協定(EPA)が発効し、今は互いにほとんどの製品の関税が撤廃されているので、いろいろな面で日本企業がモンゴルに進出しやすくなったと思う。モンゴルでは今、このような形で国づくりが進んでいる。

(2017年10月28日「富山県ものづくり総合見本市2017」海外投資環境セミナーにおける講演より)